子どもの体力づくりを

法政大講師　早川元二

体ばかり大きくて 体力のない子

このごろの子どもは、昔の子どもに比べると、たいへん、からだが大きくなりました。

大平洋戦争の時に、日本の子どもは「貧困体型」といわれる「貧乏で栄養の悪い子のからだ」となってしまいました。幸にして、戦後、日本の子どもも世界各国なみに、からだが大きくなり、中学生どころか、小学校の六年生くらいで、もう親よりも大きな子どもがいる状態なのです。

ところが最近、たいへん困ったことに「いまの子どもは、からだばかり大きいが、その割には体力はない」といわれ始めてきたのです。たしかに、小学校のどのクラスにも、まるで、お相撲さんみたいなデブの男の子や女の子がいて、その子たちは、体育の時間には、鉄棒もできず、徒歩競走では一番ビリ、飛び箱では、箱のうえに飛びあがることもできないのです。しかも、体育に弱いのは、デブちゃんばかりではありません。ふつうのからだの子のなかにも、がんばって、走ったり、飛んだり、投げたりが大嫌いな子が多いのです。これはいったいどうしたことでしょう。

子どもよ！ 体を鍛えておけ！

現代っ子がからだばかり大きくて、体力がないのは、小さい時から、からだを鍛えるチャンスがなかったからです。いまの子どもは家庭のなかにばかりひっ込んでくらしています。なぜなら、ママが「友だちと遊んでいるよりも、家で勉強していてくれたほうがいい…」と考えているからです。それは「外に出れば交通事故にあう危険がある」ということにもよりますが、子どもは、いつも家のなかでママと一緒にくらしていたのでは、一人前の社会人にはなれないのです。子どもは三歳半ごろから友だちのなかで遊び、そのなかでからだと心の積極性を身につけていくのです。とくに、小学校の三年生から中一ぐらいの間は「ギャング時代」といわれる時期なのです。それなのに、いつも机にすわって勉強していたり、テレビにかじりついていたりしたのでは、体力がつかないのは当然だと思うのです。

それを、ママがいつも、子どもの手助けばかりして、甘やかしていると、子どもは自立的に行動しないので、やはり、体力が育たないのです。

さあ、いよいよ、スポーツの秋です。「若者よ！からだを鍛えておけ！子どもよ！からだを鍛えておけ！」です。少し、がまんさせて、体力への自信を育てましょう

（はやかわ・もとじ氏は日本女子体育短大教授・児童心理学者）

夫へ一言

家族のスローガンを

子どもたちは、長男が就転して北九州にいて、次男は短大で、家には高校生の長女と私たち夫婦がいます。

私も洋服店に勤めていますが、毎日家に帰ったら、それぞれ今日あったことを話し合います。

その家族会議の中で何かやることを決めて〝スローガン〟をかかげます。いま黒板にかかれているスローガンは〝朝起きたら、まずあいさつをしよう〟というのです。簡単なようでなかなか守れませんね。完全実行できるまでスローガンがかかげられることになっています。

就転してみて

長男は学校に行っているころ、〝お父さん、きついのに家に帰ってからまで会議やなんかでバタバタせんでも〟といってました。ところが就転してみてはじめて〝組合があっても会社のいうなりの組合ではどんなにあわれか、本当に腹が立ってしようがない。お父さんのいっていたことの正しさがはじめて身にしみて判った〟といっています。

ところが住みよい社会を作ろうといいながら、親の方が昔からの教育で、いつのまにか「子どもは人に使われる人間にしたくない。親の二の舞はさせたくない」と思っていることに気づき、深く反省させられました。

私たちは三池労組でがんばりながら、子どもを育てるときは、やっぱり昔からの常識に左右されていないかと、お父さんと話し合ったものです。

先日、次男が北海道へ旅行した際、秋田から三池にオルグにみえた方が駅まで逢いにこられたそうで「こんなつながりは親せき以上の気がする。本当に涙が出た」と手紙がきました。

子どもたちも、全国の仲間たちの連帯の中で生きているのだと思いました。そして子どもたちは私たちをちゃんとみているのだと思います。

子どもたちが正しい生き方をしてくれるだろうという信頼は、私たち二人の生き方の正しさへの確信からしか生れてこないことを知りました。

子どもの生き方 ⑩

次の世代への信頼

港務・四山分会　松岡つぎのさん（49才）

「抵抗日記」⑱

終結の言葉

港務　柿坂敏

九月きりで「抵抗日記」を終結したいと思います。実はこのことは早くから考えつづけていたものですが、ついつい同志の言葉と執行部の寛容さに甘えて今日まで九カ月間書きつづけたことに深く責任を感じ、後悔をいたしているものです。

「みいけ」という機関紙のもつ労仂運動における重要さのなかで「抵抗」という文字のもっている意味の厳しさ、深さ、正しさ、困難さ、偉大さ、そういう大事な本質を学ぼうとする多くの三池外の活動家に、曲解されるおそれのあることに、私なりに気づいていたからであります。抵抗を唯一のトリデとして、抵抗を唯一の生き甲斐として斗っておられる組合員には、さぞや私の「抵抗日記」という題名にはニガニガしさを感じられた方もあられると思います。

ただ、私がこの随筆で訴えたかったことは、人間の善意を信じる心のあたたかさと、人間をなによりも大事にするという二つの前提なしには、いかなる思想も、運動も育たないだろうという、私なりに長い三池の斗いのなかで学びとった信念を、つとめてユニークに明るく、あたたかく表現していこうとしたのが、思想の浅さ、学習の不足から、論理的表現の必要なときすら感覚的表現に逃げこんだことが、甘い中途半端なる「抵抗日記」になった原因だと自己反省をしております。

「みいけ」を愛読していただく全国の活動家のみなさまに、くりかえして申しあげます。三池の労仂者が毎日毎日心のなかで書きつづけている「抵抗日記」は、厳しく、はげしく、エネルギッシュで、血と汗と歯ぎしりと、そして希望と展望の日記であることを申しあげ「抵抗日記」終結のおわびといたします。

一九六六年九月

川柳

三川支部　小柳重義

パチンコへ妻の抗議の目がとがり
下駄箱の除掃上から入れてゆき
見送りの妻が橋まで来て帰り
謎かけてみたがやっぱり来ぬ彼女
共稼ぎ妻の美貌が気にかかり
わが家の窓をさえぎる家が建ち
わが決意ほどに押ピンかたくおし
まちがって来たを教えてやる社宅
寝不足の夜勤を心配して起し
皆勤の朝を夫にさからわず

クリの保存と皮むき

クリを長くたくわえるときは虫のついていないものを選んで、箱に入れたかわいた砂の中に埋めておくと、かなりもちます。

また、クリの皮をむくときは、使う前の晩から水につけておくと、むきやすく、煮くずれもしません。ゆでた後もさめるまでゆで汁につけておくと、自然にシブ皮もむけやすくなります。

＝創作＝ 広子（ひろこ）の帰省（きせい）

（四山）　左藤臣芳

「だしぬけやけど、徹さんは姉さんをどう思ってはるの……」

水につかって、一通り泳ぎつかれた広子は、コウラをほして寝ころんでいる徹のそばにきて、そう質問した。

「……姉さんをどう思うって、なにが……」

徹は広子をまぶしく眺めた。

「……愛してるか、ということ」

広子はわざとにらみつける。

「……好きだよ。だけどね、初子さんはまじめ過ぎるよ。初子さんに、広ちゃんの半分でもじょうだんがいえたらな……」

「えー、じゃあたし、お転婆みたいに聞えるねいけすやな」

二人は笑いだした。広子は姉妹二人を好きだという徹が、まったく図々しく憎いと思うのだが、悪い気持ではなかった。

一週間がすぎた。のんきな広子もいよいよ大阪に帰るしたくにとりかかった。去年はおみやげに石炭人形を買ったが、会社の寮で人気をよんだものだ。広子は今年もこれにきめていた。だから、デパートに行ったのは五時近かった。そしてその帰途、銀座商店街入口で、原水禁のカンパ呼びかけを行なっている初子たちの姿を発見した。組合の青婦部が動員しているとみえて、赤い腕章を巻いた若者ばかりだ。その中で、携帯マイクでどなっているのは徹だった。広子はしばらく声をかけず、これを傍観する態度にでた。舗道の群集は多いのでそれは好都合だった。

「姉さんはなんだかんだといいながらも、彼氏と逢う時にはちゃんと逢っているんだな」と思うと、ほほえましくなった。

ところで、彼等の懸命の訴えにもかかわらず、道行く人はビラだけは受取ってくれるが、だれ一人として募金箱に近づかなかった。

徹はいささか業をにやしたか、舗道の花壇石に座りこんでしまった。そして、流れ落ちる汗をハンカチでふきだした。初子は、徹の様子をみかねたのか、用意していたおしぼりを渡し、水筒の氷水をやったりした。広子は、そんな姉の動作が、自然で少しもくったくのないのに気づいた。やはり、二人は恋人同志だった。だれが見ても似合いのカップルだ。いわゆる炭鉱マンには、姉のようなおとなしいシンの強い女がむいているのだ。きっと姉さんは、母さんみたいになるだろう……と、広子はむつまじそうに談笑する二人を目撃して、そう確信した。

そんなことがあったその日の夕方、広子は風呂帰りに社宅遊園地で徹と出逢った。徹が広子を待っていたのだ。

「広ちゃん、あした大阪に帰るって……」

「うん、予定より一日早いけど、もう退屈やわ」

「どうだろう、明日は日曜だし、僕と付き合ってくれないか。菊池水源地のキャンプを計画しているんだがね……」

「……」

「広ちゃんとは、もう今年は逢えないかも知れないしね。このまま別れてしまうのは味気ないよ」

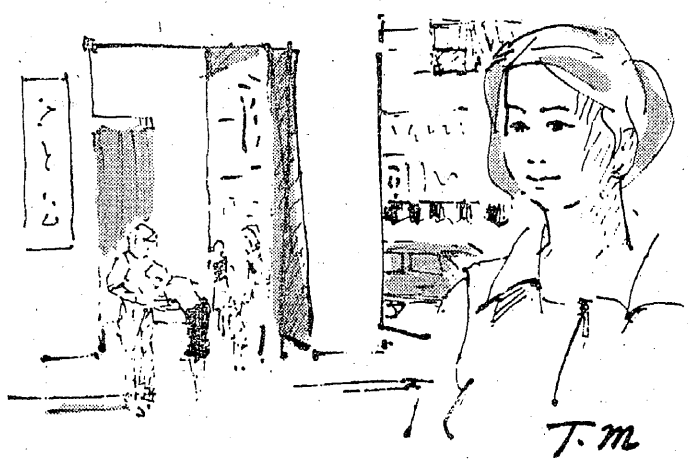
徹は照れながら早口でしゃべったが、強引に逢いびきを催促した。

「水源地ね、いってもええわ」

広子は簡単に承知した。徹は、事が事だけに、いささか抵抗があるものと覚悟していたが、あまりあっさりと広子が承知したので、目のやりばに困りだした。しかしうれしかった。その瞬間から、身体中が興奮してきた。彼はカラ咳を一つすると、大きく生唾をのみこんだ。

「広ちゃん、じゃーいいね。明日の朝一番の玉名行快速バスだよ。切符は買っておくからね、本当に約束したよ」

徹は、何度も何度も繰り返した。

広子は妙な気持だった。姉の恋人はたったいま、内密に大胆な約束をさせて去ったのだ。未成年の女を二人きりのキャンプにさそうというのだ。彼女は自分の軽率さに後悔を覚えたが、決して悪い気持ではなかった。徹は、一個の異性としては好きなタイプだった。

（つづく）